

書名：大学教育について

著者：J.S.ミル

訳者：竹内一誠

出版社：岩波書店

出版年月：2011年7月

総ページ数：177ページ

ISBN：9784003910115



推薦者

武田清

鳴門教育大学大学院教授

自然系コース（理科）

～大学で本当に学ぶべきこと～

皆さんが大学に入学した目的は何だったのでしょうか。ある人は「〇〇を学ぶために」と答えるでしょう。別の人には「教員になりたいくて」とか「教員免許が欲しくて」と答えるかもしれません。一方で、大学で提供できる教育内容が、皆さんの想定していた目的に合致しているかどうかは、入ってみないとわからない部分もあるでしょう。入ってからこんなはずではなかった、と思うのは今も昔も珍しいことではありません。最近では、受験生が大学のウェブサイトを見て情報収集するのが当たり前になっていますが、ウェブサイトでの情報は大学にとって都合のいいものや、受験生にウケの良い情報に偏るものです。ここで紹介する『大学教育について』は、そもそも大学というところでは何を学ぶところなのか、どのようなことを念頭に置いた教育がなされるのか、そもそも大学教育が本来あるべき姿はどのようなものなのか、その基礎になるものを教えてください。その意味で、本書の内容を念頭に置いて大学で学ぶことは大変有意義なものと思います。むしろその道を外さないためにも、私を含めた大学教員の側が読んでおくべきものかもしれません。

本書は著者 J.S.ミルによるスコットランドのセント・アンドリュース大学名誉学長就任講演です。1867年に行われたものですが、『いまなお燦然と輝く教養教育と大学論の古典であることは間違いない。(p.177 最終行)』と評されています。そこでは、一般教養科目こそが大学教育の中心的内容であり、そこで学んだ内容が、その後の専門教育により得られる知識をよりよく活用する手引きとなることが述べられています。当時なされた“古典的教養”と“新しい教養”のどちらを重視すべきかという論争について、その両方が同等に大切であるという著者の見解も述べられています。

この時代の英国は、折しも産業革命のまっただ中であり、産業活動が大変に伸びつつあった時代です。少し時代が下れば、エジソンら起業家が、大学での教育について強く批判したことも知られています。産業界で役立つような直接的貢献を行っていないことへの批判です。大学の教育内容についてその外側から種々の批判のあることは今も昔も変わらないところです。その中で、本書の前半で述べられる『大学は職業教育の場ではありません。(p.12 L.5)』との言明は、大学教育の最も基礎となる立場を表明しようとしているものです。現在の教育システムでも、職業教育はいわゆる専門学校や職業訓練校の守備範囲であって、大学として存在している学校では、本来これが中心に据えられることはありません。創立から何百年も経ているのが当たり前というヨーロッパの大学で、その礎がどのような精神風土の下に醸成されてきたのかが伝わってくる一冊です。

さて本書を手にとられたら、本文だけ読んで終わりにするのは少しもったいないと思います。現代日本における本書の意義をより深く理解する意味でも、訳者による解説まで、もらさず読んで欲しいと思います。特に丸山眞男の言葉として紹介されているものは、教養ある人間とはどのような人間なのかを教えます。この部分は大学に限らず、学校教育一般が育てるべき人間の目標を述べているように思えます。

